

# 孫文の訪日と「大アジア主義」講演について

## ——長崎と神戸での言説を中心に——

嵯 峨 隆

### はじめに

孫文が最後の日本訪問を行ったのは1924年11月のことである。10月23日に北京で政変が勃発して大總統の曹錕が下野し、11月1日には馮玉祥、胡景翼らが孫文に北上を要請する旨を打電した。孫文はこれを受けて北上を決意し、10日には「北上宣言」を発した。そして、13日には広州を発ち、香港を経由して17日に上海に到着した。孫文は当初、直接北上する計画であった。しかし、彼は上海で予定を変更して日本訪問を決意することになる。それは後述するように、同年9月に孫文から日本に派遣され、帰国して当地に滞在していた李烈鈞からの強い勧めを受けてのものであった。

急遽予定を変更した孫文は、上海で船を乗換え、11月23日に長崎に到着し、翌24日には神戸に到着した。孫文は神戸に6日間滞在した。この間の最大の行事としてあったのが、28日に行われた「大アジア主義」講演であったことは論を俟たない。この講演に対する従来の一般的な評価では、孫文がアジア固有の伝統に基づいて諸民族が連帯する必要性を説くと同時に、侵略的な本質を持つ日本に失望し、これとの完全な訣別を図ったものと見なされて来た。しかし、既に別稿<sup>1</sup>でも論じたように、そのような見方は晩年の孫文の思想を反帝国主義的民族解放論の中で捉えようとするものである。孫文が果たして直線的に思想を変化させたのかは疑問であるし、そもそもそのように変化させることを恰も正しい思想的発展であると思なす研究視角もまた問題であると言わざるを得ない。加えて、本論でも述べるように、それまでの孫文のアジア主義と称せられるものが、実際には著しい自国中心主義であったことからすれば、晩年の彼の立場はそうしたもののからの転換を果たしたものであったのか、或いはそれと

1 拙稿「孫文のアジア主義と日本」、『法学研究』（慶應義塾大学）、第79巻第4号、2006年4月。

は逆に従来からの延長上にあったのかという問題は、慎重に検討してみる必要があるだろう。

そこで本稿は、最後の日本訪問に到るまでの孫文の「アジア主義」の特徴を概観したうえで、1924年11月に訪日の途に就いた後の孫文の談話を分析し、それが神戸での「大アジア主義」講演とどのような関わりを持つのかを検討して行くことにする。殊更に一章をもうけて長崎での談話を取り上げるのは、そこに神戸での「大アジア主義」講演の骨子ないし原型があったとする見方が一部にあるからである<sup>2</sup>。もし、そうした見方が成り立つとすれば、講演は日本訪問に当って事前に準備されたものとなる可能性もある。だが、極めて当然のことであるが、そのように断言するには根拠となる資料の検証と、その前後の言説との関連が十分に分析・検討される必要があるのである。

## 1 孫文の訪日と「アジア主義」

一般的な定義によれば、「アジア主義」とは西洋列強の抑圧と支配に抗すべく、アジア諸国が連帯を実現させることを旨とする思想潮流を指す。その思想的起源は近代日本にあるが、それは出現当初から人種対立的観点と日本の指導性を以って最大の特徴としており、何よりもそこには、日本以外のアジアの諸民族と同一地平線上に立とうとする意識が希薄であるという問題があった。

然るに、アジア主義は中国でも唱えられるようになる。その際立った事例としては、李大釗の思想が挙げられることが多いが、孫文もまた中国での提唱者の一人と見なされている。孫文が用いる「アジア主義」という言説は、多分に日本からの影響によるものと考えられるが、1910年代末までに限って見れば、その実質は殆ど中国革命実現に向けた日中提携論の別名に外ならず、他のアジア諸国の解放ということは視野に入っておらず、しかも日本の覇権主義的アジア主義に対抗する意図を持つものでもなかった。そしてそれは、黄白人種闘争を唱えつつも、白人種の支配に取って代わろうとする国際システムの転換を企図する構想を持ったものでもなかった。そもそも、孫文自身に自覚的な「アジア主義者」としての意識があったのかということも、実は疑わしいところなのである。

さて、孫文の対日観について言えば、曾ての研究においては、それが1919年に至っ

---

2 横山宏章『長崎が会った近代中国』、海鳥社、2006年。

## 孫文の訪日と「大アジア主義」講演について

て大きく変化したとする解釈があったが、実際にはそう単純に言い切れるものではなかった。むしろ、日中提携を求める孫文の姿勢は1920年代に入っても大きな変化はなかったと言うべきである。例えば、孫文は1923年4月、旅順・大連の回収運動を行っている広東の学生運動の指導者に向かって、反日運動よりも北京政府の打倒を優先すべきだと述べていた<sup>3</sup>。また同じ頃、広東を訪ねた鶴見祐輔との会談で、孫文は日本の列強追従外交を強く批判するにも拘らず、その一方では「東洋の擁護者」としての日本の役割を高く評価していた<sup>4</sup>。このことは、当時孫文が採用しつつあった連ソ政策が、日本に対する反感と表裏をなすものではなかったことを示している。

以上のような傾向は、1923年11月に発せられた犬養毅宛の書簡の中にも現れている。即ち、そこでは「これまでの日本の失政と列強盲従の主張とを、かならずや一掃して白紙に返し、中国の革命事業に最大の力を入れられる」<sup>5</sup>ことが期待されていたのである。そして、それと同時に孫文は日本にソ連を承認するよう求めていたが、これは日本へのワシントン体制からの離脱の要求を含意した「日中ソ」提携論の提示であったと見ることができる。また、この書簡には、日本が将来「被抑圧者の友となるか、それとも被抑圧者の敵となるか」と述べた箇所があり<sup>6</sup>、これは後述する神戸での「大アジア主義」講演が中国でテキスト化される段階で付加される「王道の干城」と「霸道の番犬」に通ずるものとも見ることができる。だが、これも後に触れるところであるが、このことを以って孫文の考えの中に、人種対立論を越えた反帝国主義の傾向が現れたと見なすことは、些か性急な判断だと考えられる。

1924年9月、孫文は広東軍政府の総参謀長である李烈鈞を特使として日本に派遣した。李烈鈞は翌月10日まで東京に滞在したが、当時の日本のマスコミが報道する所によれば、その訪日の目的は孫文の「東方同盟」の結成の意向を日本に伝えると同時に、日本からの財政的支援を獲得することにあると見られていた<sup>7</sup>。果たして、日本滞在中の彼の言動を分析すると、その目的の一つに孫文の考えるアジア主義を宣伝し、「アジア大同盟」を結成することがあったことが確認されるのであるが、その具

3 「旅大回収運動ノ広東学生代表団ニ反対スル孫文ノ訓示ニ関シ報告ノ件」(1923年4月3日)、外務省『日本外交文書』大正12年第2冊、日本国際協会、1979年、240～241頁。

4 鶴見祐輔「広東大本營の孫文」(『改造』1923年7月)、陳徳仁・安井三吉編『孫文・講演「大アジア主義」資料集』、法律文化社、1989年、317頁。

5 孫文「犬養毅への書翰」(1923年11月16日)、伊地智善継・山口一郎編『孫文選集』第3巻、社会思想社、1989年、325頁。

6 同上、324頁。

7 龔辛焯『孫文の革命運動と日本』、六興出版、1989年、357頁。

体的内容は従来の日中提携論にソ連との提携を加えたものであったと見るのが最も妥当なところである。そして、内政問題では反直三角同盟への理解と支持を得ることが目的とされたと考えられる。

李烈鈞は40日にわたる日本滞在期間中、政府や軍部の要人との会談を重ねた。しかし結局、日本側は李烈鈞が提示する孫文の主張に好意的に対応することはなかった。そのため、彼は孫文に帰国することを申し入れたのであるが、孫文は許可せず、彼に長期滞在して尚も「アジア大同盟」の実現に向けて「われわれの大アジア主義」を宣伝するよう命じたのである<sup>8</sup>。ここで言う「アジア大同盟」とは、これまでの政治的文脈からすれば日中ソの提携を意味するものと考えられる。また、孫文がここで敢えて「われわれの」という限定を付けているのは、当時の日本の論壇を席卷していた日本型アジア主義との異質性を際立たせる意図を含んでのものであった。しかし、それは決して日中以外のアジア諸民族との連帯を志向するものであったとは言い難く、あくまでも中国革命達成に向けての支援を獲得することを目的とした「アジア主義」でしかなかったと考えられる。

だが、この時点で、孫文は自らの「アジア主義」が日本政府の当時の対中国政策と相容れるものでないことを理解していた。その彼に残された唯一の期待は、日本の在野の政治家、財界人、民間の運動家たちが中心となって世論を高揚させ、対中国政策を好転させることであった。それが彼の最後の訪日へと繋がったのである。孫文は上海出発に当たって次のように述べた。中国の統一は日本との提携なくしてはあり得ない。それは、決して外交辞令としての提携であってはならず、「日支両国民真の了解の下に支那を救ひ東亜の平和を確立せしめると共に黄色人種の団結を固くし以て列国の不法な圧迫に対抗せねばならぬ」<sup>9</sup>。このような認識の下、孫文は日本の朝野の人士と意見交換を行なうことによって、北京での交渉を有利に進めようと考えたのである。かくして、孫文の日本訪問は「われわれの大アジア主義」への理解を得ることにあったと考えられるのである。

しかし、孫文の「われわれの大アジア主義」は、不平等条約の処理如何をめぐっては日本の利害と深く関わるものであった。このことを前面に出しては、孫文の主張は受け入れられない可能性があった。そこで彼は、21ヵ条要求の撤廃や遼東半島還付の問題については、「何ら具体的の考を有してゐない」<sup>10</sup>と述べ、最終的に国民会議を

8 「李烈鈞に依然として日本に滞在し、アジア大同盟の結成を宣伝すべき旨を命じた電文」(1924年10月13日)、『孫文選集』第3巻、346頁。

9 「日本と提携せねば時局解決は不可能」、『大阪毎日新聞』、1924年11月22日。

10 同上。

## 孫文の訪日と「大アジア主義」講演について

開催して国論を聞いた上で最終決定することを表明したのである。恐らく孫文の考えの中には、日本に譲歩してでも支持を得て、英米を後ろ楯とする直隸派を壊滅に追い込みたいという方針が固まっていたものと考えられる。翌 22 日、孫文は船内でのインタビューに答えて、今後もし日本が列強の侵略や共同管理といった行動に追随せず、中国に野心を持たないことを表明すれば、中国国民の疑念は払拭されるであろうと述べた<sup>11</sup>。孫文は、前年からこの年にかけての関余問題、商団事件に際しての日本の姿勢が広東政府に好意的なものと見ており、列強とは一線を画した日本の方針が今後も継続されることを期待していたのである。

以上のことから、孫文が訪日時に抱いていた「アジア主義」とは、日本政府に広東政府をパートナーとした日中提携を求めるものであり、この点では従来の方針に変化はなかった。孫文の政策に変化があったとすれば、そこにもう一つの提携対象としてソ連が加えられたことであった。そして、「日中ソ」の三国提携が可能となるには日本のソ連承認が必要となることは明らかであった。そのことを目的とした、先の李烈鈞の工作が奏効しなかったため、今度は自らの口から訴えるべく孫文は日本に渡ったのである。

## 2 長崎での孫文談話

孫文は 11 月 23 日正午に長崎港に到着した。彼が長崎に滞在したのは僅か 5 時間に過ぎず、船を降りることはなかった。孫文は先ず日本の新聞記者との共同記者会見を行なった。

この時の孫文の談話の概要は、日本文のものは翌日の地元紙『東洋日の出新聞』に「中華民国を左右するは国民の力のみ」という見出しで掲載され、中国文では翌年広州の民智書局から出版された『孫中山先生由上海過日本之言論』に「対長崎新聞記者之談話」として収録されている<sup>12</sup>。前者では孫文の回答のみが記され、後者では記者との問答形式となっているが、当然の事ながらその内容は殆ど同じである。孫文はここで、広東政府とソ連との関係について触れ、ロシア革命を高く評価しつつも両国の制度と国情が異なることを強調した。そして、日本の対中国政策については、中国革命が明治維新の道を歩もうとしているにも拘らず、富強を実現した後の日本は中国に

11 「欧米諸国の野心が支那動乱の原因」、『大阪毎日新聞』、1924 年 11 月 23 日。

12 なお、『孫中山全集』第 11 巻（中華書局、北京、1985 年）では「与長崎新聞記者的談話」という題名に変えられている。

同情心を持ってくれないと批判する一方、この点で中国革命の挫折に同情してくれるソ連には親近感を覚えると述べた。孫文は、日本の世論に配慮しつつも、自らの持論を提示したのである。

続いて、孫文は別室に移り、戴季陶の通訳を介して長崎選出の衆議院議員である西岡竹次郎と会談した。孫文の談話の概要は、長崎県知事から外務大臣宛ての報告書に記されている。それによれば、孫文は西岡に対して「現下ノ支那問題」の解決のためには「亜細亜民族ノ結合」という根本問題の解決が必要であるとした上で、日本は欧米諸国に媚びることを止めてこの課題のために努めるべきであるとして次のように論じた。「将来日本ハ亜細亜民族聯盟ノ覇者トナリ、欧米ニ對抗スヘク亜細亜全体ヲ連結シ亜細亜ノ独立ヲ図リ、以テ欧州ノ圧迫ノ羈絆ヲ脱スル様努メサル可カラス。亦日本ハ須ラク労農露国ヲ速カニ承認スヘシ」<sup>13</sup>。ここでは、孫文が想定する「亜細亜全体」が何処までを指すのかは明らかではない。しかし、少なくともこの時点では日中ソの提携による列強への抵抗が想定されているにも拘らず、日本のアジアでの指導性を認めるという点では、前年の広東での鶴見祐輔との会見内容の延長線上にあると言えるであろう。これもやはり、日本の世論に対する配慮と見ることができる。

以上の西岡竹次郎との会談は11月24日の『東洋日の出新聞』にも掲載された。このことに関する資料が日本側にしか残されていないところからすれば、この会談には中国人記者は居合わせていなかったことが推察される。そして、『東洋日の出新聞』の記事と外務大臣宛ての報告書とを照らし合わせて検討してみると、これが該紙記者の単独会見でないことは容易に理解できるところである。今、該紙掲載の記事を分かりやすく整理すれば以下のようなになる。

孫文は西岡に向かって日本の使命を説きつつ、次のような「東亜の東亜たる持論」を展開した。即ち、①日本はアジアの盟主の地位を確立し、然る後にアジア民族のために尽力すべきであるにも拘らず、その使命を誤り、逆に列強の一員としてアジアに強欲な姿勢を示していることには同意できないこと、②日本の対アジア政策は欧米のそれとは正反対のものであるべきにも拘らず、逆に欧米の尻馬に乗って、「東亜の日本が東亜を傷はんとする」が如きは愚かしい行ないであること、③今日の時代は日本が列強の隊列から離れる絶好の機会であること、④アジアの目覚めた国々が、漸く世界にその存在を知らしめるようになって来たこと、⑤日本はそうした国々の盟主とし

13 「北上ノ途次本邦ニ立寄リタル孫文一行ノ動静並ビニ邦人記者トノ会見模様ニツキ報告ノ件」(1924年11月24日)、『日本外交文書』大正13年第2冊、571頁。尚、引用に際して句読点を付した。

## 孫文の訪日と「大アジア主義」講演について

て「東亜大策」を立て、彼らを率いて欧米に当るべきこと、そして、⑥ロシアと対立する列強諸国ですらこれを承認する姿勢を窺わせている中で、一向に承認しようとしていない日本の態度は「大なる失敗」と言わざるを得ないことである<sup>14</sup>。

以上の孫文の談話の内容は、彼が前月に李烈鈞に宛てた書簡の中で述べた「われわれの大アジア主義」の範囲を超えるものではない。そして、彼が考えるアジアの大同盟にはソ連の参加が必須であり、その前提となるべきことは日本のソ連承認であった。そのため、孫文は西岡竹次郎のような「日本要路ノ代議士」が、政府を督励して政策を変更させるよう求めたのである<sup>15</sup>。

ところで、『東洋日の出新聞』の記事で大いに興味を引かれるところは、欧米に対抗すべしという孫文の言説を「大亜細亜主義」という言葉で説明していることである。外務大臣宛ての報告書に記されているところでは、「亜細亜民族聯盟ノ覇者トナリ、欧米ニ対抗スヘク亜細亜全体ヲ連結シ亜細亜ノ独立ヲ図リ」という部分がそれに当たるが、そこには「大亜細亜主義」の如き特定の名称は現れておらず、孫文が会談で果たしてこの言葉を使ったのかどうかも疑わしいところである。そもそも、孫文の政治的生涯を振り返る時、彼は自らの外交思想を恒常的に「アジア主義」という名称によって表現していた訳ではなかった。そうだとすれば、『東洋日の出新聞』の記事で「大亜細亜主義」という言葉が使われているのは、或いは記者が孫文の主張をこの言葉で置き換えた可能性もあるのではないかと推察される。即ち、『東洋日の出新聞』社長の鈴木天眼が国家主義的な對外硬論者であり、膨脹主義的な国権派的アジア主義の系譜に属す人物であり、頭山満の玄洋社や内田良平の黒龍会とも親交があったことからすれば<sup>16</sup>、該紙の記者が孫文の言葉の中に日本型アジア主義との最大公約数の部分を嗅ぎ取ることは極めて容易なことであり、そして自然なことであったと考えられるのである。

さて、孫文は記者たちとの懇談を終えると、歓迎のために訪れた中国人留学生の代表と接見した<sup>17</sup>。日本の新聞はこのことに触れていないが、孫文はここで、日本にいる中国人留学生が日本人に対して中国革命を支持するよう働き掛けなければならないと訴えた。そして、次のようにも述べた。「もし日本人が中国の現況に真に同情する

14 横山宏章、前掲書、205～206頁。

15 「北上ノ途次本邦ニ立寄りタル孫文一行ノ動静並ビニ邦人記者トノ会見模様ニツキ報告ノ件」、571頁。

16 横山宏章、前掲書、118頁。

17 外務大臣宛の報告書では、留学生との接見が最初に書かれているが、ここでは陳錫祺主編『孫中山年譜長編（下冊）』（中華書局、北京、1991年、2075頁）に従った。

なら、中国を支援して不平等な条約を廃棄し、税関、租界と領事裁判権を奪回すべきであり、日本が中国を支援して、この大事業を成し遂げることができたなら、日本は中国における現在の小さな権益ではなく、将来、より大きな権利を得ることになります。いま、日本が中国を支援して、こういうことをやるのは、一時的には不利かもしれないが、中国国民から歓迎され、中国と日本はかならず親善になり、親善の程度は高まるにちがいない」<sup>18</sup>。

ここでは以下の点に注目すべきである。第一には、孫文が上海を出発する時点では一応留保していた不平等条約の廃棄が必要であると明言していることである。しかし、ここではそれが極めて一般的な内容になっていることに気がつく。即ち、日本の特殊権益に絡むことについては一切言及されていないのである。孫文は反帝国主義の姿勢を見せてはいるものの、ここからは日本との矛盾は出来るだけ回避したいという意向が窺えるのである。第二は、日本が不平等条約廃棄に協力してくれたなら、「現在の小さな利益ではなく、将来、より大きな権利を得る」ことになるだろうと述べていることである。ここには、大義を説くと同時に、現実的利害を重んじる孫文の特徴が出ていると言うべきであろう。

以上において、長崎滞在時における孫文の談話を検討して来た。概括的に言えば、それらが中国革命の達成に向けての国際戦略である「日中ソ」提携という、来日以前からの方針の延長線上にあることは間違いない。それは、いわゆる「われわれの大アジア主義」であって、日本型のアジア主義に対置されたものであったのである。しかし先にも触れたように、『東洋日の出新聞』の記者が、そのような内容を持つ孫文の主張を「大亜細亜主義」と書き記したことは、この新聞社の性格に加えて当時の時代的背景を窺わせるものがある。即ち、当時の日本の論壇においては、アメリカの排日移民法の成立などを契機として、横暴なる白人種の世界支配に対抗すべしとして、アジア主義が再燃していたのである。1924年10月に「大亜細亜主義」特集を掲載した『日本及日本人』臨時増刊号が刊行されたことは、そうした傾向を象徴的に現わしていたのである。

しかし、そのような論壇の雰囲気にも拘らず、日本のマスコミは孫文の訪日に対してはさほど好意的な反応を示さなかった。むしろ、批判的なものが多く見られたと言っても良い。例えば、11月24日の『大阪毎日新聞』に掲載された論説記事は、孫文が余りにも理想主義的であって現実に疎いと批判し、彼が「広東一省に於てすら其理想

18 「学生は国民会議にぜひ賛成すべきである」(1924年11月23日)、『孫文選集』第3巻、354頁。



## 孫文の訪日と「大アジア主義」講演について

を実現することの出来なかったことを思ふ時、支那全土に対する理想実現の如何に困難であるかは多くを言ふを要しない」と述べ、孫文には「急進主義と露骨なる排外主義の危険を警告せざるを得ぬ」と述べていた<sup>19</sup>。このようなマスコミの論調は、中国の漸進的な改革を望むという政府の方針に沿うものであった。そうした中で、長崎の地方紙が孫文の「われわれの大アジア主義」を「大亜細亜主義」と結びつけ、しかも好意的に論評したことは、恐らく日本のマスコミでは初めての事例であったと考えられる。だが、孫文の談話に限って言えば、長崎におけるそれは上海での声明と殆ど内容が変わるものではなかったのである。

以上のことからすれば、長崎における孫文の談話の中には際立った目新しさはなかったと判断される。そして、この時点ではまだ神戸での講演会が予定されていなかったことを考慮に入れる時、「大アジア主義」講演の起源をここに求めることは極めて困難であると言わなければならないのである。また、これは想像の域を超えるものではないが、歓迎する側にとっての孫文は特別な存在であったであろうが、孫文にしてみれば、長崎は東上するための通過点でしかなかったと言うべきかもしれない。

### 3 神戸での「大アジア主義」講演

孫文は11月24日神戸に到着した。当日の記者会見において、孫文はこの度の訪日の目的が「政治的及其ノ他何等ノ意味ヲ有セス」として、北方での会議に赴くに当たっての交通事情によると述べたが<sup>20</sup>、実際は、これは計画的な行動であった。そして孫文は、東京に行く考えは持っていないとも述べているが、これも実際には上京の意図はあったものの、東京での国民党関係者による日本外務省当局との事前交渉が不調に終わったことを踏まえての発言であった。この時の会見で、孫文は中国の統一と内政の安定を妨げているのは不平等条約を利用した外国人が軍閥を指嚇するためであるとし、諸悪の根源であるこの不平等条約の撤廃のために助力してくれる国は日本だけであると述べた<sup>21</sup>。

孫文は、上海出発前には日本の要人との会談を計画していたが、日本人側が不熱心

19 「孫文氏来る 吾等の苦言」、『大阪毎日新聞』1924年11月24日、『孫文・講演「大アジア主義」資料集』、129頁。

20 「神戸来着ノ孫文ノ船上ニ於ケル記者会見及ビ埠頭ノ歓迎情况等報告ノ件」(1924年11月25日)、『日本外交文書』大正13年第2冊、572頁。

21 同上、572～573頁。

であるとの情報が既に彼のもとに伝わっており、実際その目的は不調に終わった。孫文から電報で来神を求められた渋沢栄一は病気を理由に面会を断った。盟友と目されていた犬養毅は代理人として自らの懐刀である古島一雄を派遣したに止まった。そうした中で、独り神戸の孫文に面会に訪れたのが国権主義的アジア主義者として知られる頭山満であった。頭山にも上海の孫文から「東亜大局につき御相談したし、神戸まで御来駕あらば幸甚」<sup>22</sup>との電報が来ていたのである。この時、孫文は頭山に不平等条約廃棄の主張への支持を求めている——少なくとも頭山の側ではそのように理解していた。予てより、頭山は孫文の希望に同情するところ大であり、彼の態度如何では政界の動向が変化を来すことも十分に予想されていた。しかし、国権派アジア主義者の間では満州問題の処理の仕方が最も懸念された。そこで、この会談に先立って、同じく国権主義者の巨頭である内田良平は、頭山に対して「このさいに満州問題については、確りと一本釘を打ってもらいたい」と勧告していたのである<sup>23</sup>。

孫文と頭山の会談は、神戸のオリエンタルホテルで25日と26日に行われた。25日の会談で孫文は、中国が曾て諸外国との間で締結した不平等条約の撤廃に日本人が進んで協力してくれるよう要請した。頭山は関税自主権の確立、治外法権の撤廃については、及ぶ限りの協力をするを約束した。しかし、満蒙における特殊権益については、これを決して譲る気のないことを述べた。曰く、「将来、貴国の国情が大に改善せられ、何等他国の侵害を受くる懸念のなくなった場合は、勿論還附すべきであるが、目下オイソレと還附の要求に応ずるが如きは、我が国民の大多数が之を承知しないであらう」<sup>24</sup>。戴季陶の通訳でこのことを聞いた孫文は、「顔色異常に緊張するを見た」ということであり、この時点での満州問題の解決の厳しさを認識したと考えられる。翌日の会談では、頭山の門下生である藤本尚則らが満蒙の既得権益、具体的には旅順・大連の回収問題についての孫文の考えを質した。孫文はこれに答えて、「それは一般的に旧条約の撤廃を望むのであって、旅順大連の回収等といふ所まで考へてはるない」と述べ、この問題が「現在出来上って居る以上に、更に其勢力が拡大する場合は問題になるが、今の通りの勢力が維持される以上、問題の起ることはない」<sup>25</sup>と現状維持の立場を表明したのである。

我々はここで、孫文が前年の4月の時点で、旅順・大連回収闘争を抑制してでも日

22 藤本尚則『巨人頭山満翁』、文雅堂書店、1942年、518頁。

23 葦津珍彦『大アジア主義と頭山満（増補版）』、日本教文社、1972年、171頁。

24 『巨人頭山満翁』、525頁。

25 同上、526頁。

## 孫文の訪日と「大アジア主義」講演について

本との関係を維持しておこうとしていたことを想起すべきである。このことからすれば、孫文は頭山との会談で日本の世論の瀬踏みを行ない、以前から設定していた最大限の譲歩ラインを確認したものと言えるであろう。孫文はここで、「われわれの大アジア主義」と日本の国権派アジア主義者との共通の領域を超えないことが、政治的支持を勝ち得るための唯一の手段であることを認識したものと考えられる。数日後の講演での孫文の「反帝国主義」の度合は、この時点で確定されていたと見ることができるであろう。

次に、孫文が神戸で行なった最大の行事である「大アジア主義」講演について見て行くことにする。

孫文の講演は事前に予定されたものではなかった。それは、神戸到着の翌日である25日に行われた西川莊三（神戸商業会議所会頭）との会談で決定されたものである。地元新聞社の社告からも分かるように、当日に予定された演題は「大亜細亜問題」であった<sup>26</sup>。ここでは一つの疑問が生じてくるだろう。それは、当時の日本の政界やマスコミの多くが孫文の訪日に冷淡な姿勢を取っていたにも拘らず、何故このような演題が用意されたのかということである。これには当時の神戸の抱えていた問題が大きく関わっていた。即ち、神戸の経済界は、それまで主意を占めていたアメリカとの輸出入総額が大幅に減少したため、中国市場へと目を向けたにも拘らず、それがアメリカによって奪われてしまうのではないかという危機感を抱いていたのである。ここには、「不平等条約という既得権を放棄してでも中国の友情を繋ぎとめ、大アジア主義＝王道主義の名のもとにアメリカを排除して中国における日本の地位を確立し、日本経済繁栄の基礎をここに置こうとする論理が胚胎していた」のである<sup>27</sup>。

ただ、不平等条約の廃棄と言っても、神戸商業会議所の立場が孫文の主張と完全に合致していた訳ではない。彼ら経済人の立場は、関税自主権の回復という点では賛成であるが、しかし旅順・大連などの租借地や天津などの租界の返還、更には21ヵ条要求の撤廃には反対するというものであった。日中貿易の促進のためには、中国の平和的統一と日中関係の安定が必要と考えられていたのである<sup>28</sup>。孫文が、果たして彼らの立場をどの程度まで認識していたかは分からない。しかし、孫文にとって商業会

26 この講演が「大アジア主義」として残されるのは、孫文自身が講演の冒頭で「大アジア主義」について述べると言ったからに外ならない。

27 三輪公忠「1924年排日移民法の成立と米貨ボイコット—神戸市の場合を中心として—」、細谷千博編『太平洋・アジア圏の国際経済紛争史 1922-1945』、東京大学出版会、1983年、156頁。

28 陳徳仁・安井三吉『孫文と神戸（増訂版）』、神戸新聞総合センター、2002年、248頁。

議所の申し出は正に「渡りに舟」の如きものであったと考えられる。何故なら、日本到着以後、孫文は新聞記者や少数の日本人と面会する機会があったものの、一般の日本人に向けての講演は全く予定されていなかったからである。そして、孫文が講演を行なうことが決定されると、彼は「アジア主義者」としての扱いを受けることになる。例えば、後援団体の一つである『神戸又新日報』の社告では、孫文を「東亜聯盟の唱首であり、日支親善の楔子」と称し、読者に対しては「日支親善と亜細亜民族聯盟に向って百尺竿頭一步を進むるの途をたづねよ」呼び掛けたのである<sup>29</sup>。

次に、11月28日に神戸女学校で行われた「大アジア主義」講演の内容について概観して行くことにしよう。

孫文は講演の冒頭で次のように述べる。アジアは世界最古の文化の発祥地であるにも拘らず、数百年このかたアジアは衰退の一途を辿って来た。しかし、ようやく30年前になって再び復興したが、その先駆けとなったのは日本によるヨーロッパ諸国との不平等条約の撤廃であった。それはアジア民族復興の日だったのであり、日本の独立はアジアの全ての国と民族に希望を与えるものであった。そしてその後の日露戦争での日本の勝利は、この数百年間においてはヨーロッパ人に対するアジア民族の初めての勝利であって、アジア各地の民族独立運動はこれによって大いに刺激を受けることとなった。この独立という事実こそ、アジア民族の思想が最近進歩したことを示すものであり、これが更に発展して最高潮になった時、全アジアの民族は提携できるようになり、独立を勝ち取ることができるのである。現在、アジアの民族の間で連帯感の高まりが見られるようになっているが、東アジアの最大の民族は言うまでもなく日本と中国であり、この二国の提携は民族独立運動を始め様々な方面で多大な影響力を生み出すことが必定であるため、是非とも提携を実現させなければならないのである。以上の文脈から分かるように、孫文は中国と列強との間の治外法権などを含む不平等条約の撤廃については直接言及することはせず、日本の過去の事例を引き合いにすることによって、暗にそのことを日本人に知らしめ、それが将来の提携の前提となるであろうことを述べたのである。もちろん、孫文は講演の中で満蒙における日本の權益問題に触れることは全くなかった。それが数日前に行われた頭山滿との会談に起因するものであることは、我々は容易に想像できるところである。

次いで、孫文は東西文化の優劣の比較を行なう。孫文が説くところでは、この数百年というもの、西洋の物質文明は大きく発達し他の地域を凌駕していることは事実で

---

29 「孫文氏講演会社告」、『神戸又新日報』1924年11月27日。

## 孫文の訪日と「大アジア主義」講演について

ある。しかし、東洋の文化は仁義道德を主張する王道であり、西洋文化は功利と強権を主張する霸道であるが、両者を比較してみた場合、明かに前者が優っているのである。そして、この仁義道德の王道文化こそが「大アジア主義」の基礎になるべきものであった。孫文は次のように述べる。「『大アジア主義』を打ち立てるには、何を基礎とすべきでしょうか。われわれの固有の文化を基礎としなければなりません。道德を主張し、仁義を説かねばなりません。仁義、道德こそは、われわれの『大アジア主義』の優れた基礎であります」<sup>30</sup>。そして、仁義、道德を基礎として各地の民族を連合すれば、「全アジアの民族は、ひじょうに大きな勢力を有する」ことになると思われるのである<sup>31</sup>。

孫文の王道の立場から連帯の対象と見なされたのは、「アジア」という地理的空間に限られたものではなかった。即ち、革命後のロシアは仁義、道德を唱え列強の功利と強権に反対しており、この点から東洋の王道文化と共通するものがあると見なされ、連合の中に加えるべきだとしていたのである<sup>32</sup>。これは言うまでもなく当時の連ソ政策をアジア主義の中に取り込んだものであった。こうした傾向から、この講演に代表される晩年の孫文の姿勢をレーニンの反帝国主義的民族主義との関連で評価する見方もある。しかし、講演全体から見た場合、ヨーロッパの列強に対置された中国と他の被抑圧民族が対等の立場に置かれていたのかと言えば、それは極めて疑問であると言わざるを得ない。

そのことを最も顕著に現わしているのは、ネパールが中国を今に至るまで宗主国として仰ぎ続けているとして、これを王道文化に基づいた理想的な国家関係と見なしていることである。このことは、前近代的な宗藩関係が近代的国際政治秩序における「抑圧—被抑圧」関係に優ると述べているに等しく、そこには中国を頂点に据えたアジア権威主義体制に通じるものはあっても、中国と他の被抑圧民族とが平等の関係での連帯が作り出される可能性は存在しないのである。孫文が最も優先すべき課題と考えたのは中国革命の勝利であり、それより以前に他民族の独立を支援することは考えられていなかった。むしろ、孫文の立場は自国の革命を優先した強国依存型の民族解放というべきものであり、反帝国主義に基づいたものではなかったと考えられる。ソ連との提携はそうした考えに基づいたものであったと判断すべきであろう。

30 孫文「大アジア主義」(1924年11月28日)、『孫文選集』第3巻、371～372頁。

31 同上、372頁。

32 同上、374頁。

最後に問題となるのは日本に対する評価である。果たして、日中提携論は放棄されたのであろうか。この問題でしばしば引き合いに出されるのが、講演末尾の一節である。そこには次のように書かれている。「あなたがた日本民族は、欧米の覇道の文化を取り入れていると同時に、アジアの王道文化の本質も持っています。日本がこれからのち、世界の文化の前途に対して、いったい西洋の覇道の番犬となるのか、東洋の王道の干城となるのか、あなたがた日本国民がよく考え、慎重に選ぶことにかかっているのです」<sup>33</sup>。

この最後の部分を孫文の講演の結論として読むなら、講演の趣旨は日本との30年にも及ぶ関係を清算しようとするものであったと見ることも可能である。しかし、この部分は日本の新聞に掲載された講演記録では欠落していた。これが付け加えられたのは、12月8日に上海の『民国日報』に掲載された「孫先生『大亞洲主義』演説辞」という一文においてである。実際の講演でも、孫文がこの部分を述べなかったことはほぼ確実である。そのことは、当日の兵庫県知事から若槻礼次郎内務大臣に宛てた報告書に附された講演の要旨<sup>34</sup>にも、その部分についての言及がないことから推察される。仮に孫文が日本批判を行っていたなら、その箇所は重要な問題として報告書に記載されて当然だからである。

このように、「大アジア主義」講演の中で孫文が日本批判の象徴とも言うべき言葉を述べていなかったことからすれば、この時点での彼の姿勢を反日的と見なすことは妥当性を欠くことになるであろう。むしろ、少なくとも訪日時点での孫文は、日本との提携によって列強に対抗しようとしていた可能性が高かったと考えられるのである。

## おわりに

本稿では、孫文の最後の日本訪問時における言説を分析し、神戸での「大アジア主義」講演に結実する彼のアジア主義の特徴について検討して来た。本稿で明かにされたのは、以下の諸点である。

孫文が日本訪問時点で抱いていたアジア主義とは、当時の日本の論壇に広く見られた言説とは異なり、広東政権をパートナーとした日中提携論を求めたものであり、中

33 「大アジア主義」、375頁。

34 「神戸滞在中ノ孫文ノ動静並ビニッソノ講演要旨報告ノ件」(1924年11月28日)、『日本外交文書』大正13年第2冊、574～577頁。

## 孫文の訪日と「大アジア主義」講演について

国の変革を前提とするものであった。そうした傾向は、従来の姿勢の延長線上にあったとすることができる。そこに新しい要素としてソ連との提携が加わったのであるが、日中ソ三国の提携が可能となるには日本によるソ連の承認が是非とも必要であった。1924年11月における孫文の訪日の目的は、日本にそうしたことを内容とする「われわれの大アジア主義」への支持を得ることであった。

長崎滞在中の孫文の談話は、訪日前の言説を繰り返したものであった。当地の新聞記者はその言説を「大亜細亜主義」と称したが、それは必ずしも孫文の側から発せられたものではなく、日本論壇のアジア主義言説を投影したものであったと考えられる。従って、そこには神戸での「大アジア主義」講演と直接に結びつけるものはなかったと判断される。しかも、神戸での講演は事前に予定されていたものではなかった。そのため、講演に向けての周到な準備があったとは考え難いのである。

神戸での「大アジア主義」講演の内容については、概ね以下のようなことが言えるであろう。先ず、孫文は被抑圧民族の解放を論じてはいるが、それは必ずしも反帝国主義の立場に基づいてのものではなかったということである。そして、そこでは日本批判の姿勢も確認することができず、むしろ日本に対する期待感が持続していたと理解する方が妥当であると考えられる。総じて、この講演は中国革命の達成を妨げている英米列強に抗すべく、日中ソ三国の提携を呼び掛けたものであって、孫文がおおよそ二ヵ月前に述べていた「われわれの大アジア主義」を提示したものであったと言えるのである。もちろん、それは日本の論壇で燃え上がっている日本型アジア主義と相容れるものではなかった。しかし、そうであるからと言って、この講演を過大に評価して、孫文が反帝国主義的な民族解放論の立場に移行したと判断することはできず、また日本と訣別したと見なし得るものでもなかったのである。